OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	元時代景徳鎮窯における技法と文様の関係について : 青花，釉裏紅を中心に
Author(s)	村上，恭子
Citation	デザイン理論. 2000, 39, p. 57-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52774
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

元時代景徳鎮窯における技法と文様の関係について
―― 青花，釉裏紅を中心に ――

村　上　恭　子
関西学院大学

キーワード
景徳鎮，青花，釉裏紅，元時代
Jingdezhen, Blue and White, underglaze red,
Yuan dynasty

はじめに
1．青花匜と釉裏紅匜の装飾構成
2．青花玉壷春瓶と釉裏紅玉壷春瓶，及び青白磁玉壷春瓶の装飾構成
3．青花罐と釉裏紅罐，及び青白磁罐の装飾構成
4．青花梅瓶と釉裏紅梅瓶，及び青白磁梅瓶の装飾構成
5．ラマ式蓮弁文について
6．例外的な作例について
おわりに

はじめに

釉下にコバルトで絵付けをした磁器は中国で青花磁器と呼ばれる。日本では染付の名で知られるこの技法が，中国の景徳鎮窯で元時代後期に既に始まっていたと考えられるようになったのは，1929年，R. L. ホブソン氏により元時代末期にあたる至正十一（1351）年の銘を持つ青花の大瓶（デビッド財団蔵）が取り上げられたことによる。1950年にはJ. A. ポープ氏がこの瓶（所謂デビッド瓶）をもとにイランのアルデビル廟とトルコのトプカピ博物館の青花磁器コレクションを比較，研究し，同様の様式を示す元時代青花の一群を選び出し，それらを至正様式と名付けた[注1]。

以後，青花の技法が，中国でどのように誕生し，発展したのかについて関心が高まるようになった。青花誕生の始まった時期は，唐時代[注2]，宋時代[注3]といった見方もあるが，今のところ青花の大量生産が開始されたのは，景徳鎮窯で元時代後期にあたる十四世紀前半頃であると考えられている。これまでの中国にはない新しい技法でありながら，ほぼ完成された青花とみられる至正様式まで，誕生からわずか数十年の間に到達したと思われることから，ポープ氏の研究以後，青花がどのような契機で景徳鎮窯で始まったのか，その起源をもとめようとする研究が盛んになった。低火度ではあるが，青花と全く同じ原理の技法がイスラム圏では九世紀以来作られていることなどから，イスラムの影響下で青花は誕生したという説[注4]，また，中国国

内の彩絵技法の影響を受けて青花が始まったという説[注5]，景徳鎮窯内で青花以前にある青白磁や枢府白磁といったものから青花は誕生したという説[注6]等々がある。

元時代後期の景徳鎮窯では，青花以外にも釉下に銅で絵付けをした釉裏紅と呼ばれる磁器も誕生している。釉裏紅はその釉下彩の技法や文様が青花と共通しており，青花と同じ元時代後期に始まったと考えられる。技法や文様，器形からも，青花と非常に近い関係であることは確かであるが，両者はまた相違するところもある。現在伝世しているものの殆どは青花であり，釉裏紅はごく少数である。絵付けは青花に比べて釉裏紅は簡素になる傾向がある。また装飾構成でも，青花では器面全体に文様が緻密に充填されているのに対し，釉裏紅では文様が省略されがちである。すなわち青花と釉裏紅は器種も文様も共通したところがありながら，同時に異なった様相を呈している。では，元時代後期景徳鎮窯において，釉裏紅はどのような位置付けがされるのであろうか。大きく二通りの考えに大別できる。基本的に双方の考えとも，釉裏紅が青花に比べて文様が単純で，装飾構成が簡素な点を認めることでは一致しているが，その解釈で異なりをみせる。一つは，釉裏紅の絵付けのラフな点を，輸出向けに量産されたためであるとする考えである。元時代景徳鎮窯の磁器は，輸出品としての性格を持っている。大型の青花の多くはイスラム圏に伝世し，東南アジアにみられる青花の多くは小品である。しかし逆に釉裏紅の出土は東南アジアに集中しており，イスラム圏ではほとんどみられない。つまり，釉裏紅の絵付けが簡素であるのは，富裕なイスラム圏向けの青花とは異なり，供給先が小品中心の東南アジアであったためであるという説である[注7]。

それに対し，釉裏紅のラフな筆致で描かれる文様と簡素な装飾構成は，新しい技法の始まりを示すものである，と解釈する立場もある[注8]。これは同時期に景徳鎮窯で焼成されている青白磁刻花紅釉に注目し，釉裏紅はそれから誕生し，のちの至正様式の青花をつくり出したという説である。青花と釉裏紅のどちらが先に景徳鎮窯で誕生したのかについては，これまで明確な判断は避けられているようである[注9]。釉裏紅が青花に先行するという説は，青花の起源に関する諸説に一石を投じたものといえよう。

以上のように，青花と釉裏紅の関係についての考えは一様ではない。今回，青花と釉裏紅の比較を，上記の説を踏まえたうえで，次の点に留意して行なう。青花と釉裏紅の比較は，これまで特定の器種に絞って行なわれたり，あるいは複数の器種から似通った文様を抽出するという方法で論じられてきた。そこで今回は，両者の比較をより広範囲にかつ，数量的に行なうため，現在図版等で紹介されている資料から可能な限りの作例を取り上げ，表を用いて器種ごとの比較を行なう[注10]。その表に基づき，青花に比べて釉裏紅の特長である，簡素な装飾構成は初期的な段階ゆえに生じたものであるのか，または他の理由が考えられるのかについて考察する。青花と釉裏紅を比較する際に，青花や釉裏紅より早い時期に景徳鎮窯で焼成され，両者と

文様面でも共通する点の多い青白磁や枢府白磁も参考資料としている。

1．青花匜と釉裏紅匜の装飾構成

匜（い）とは片口のことであり，元時代に流行した器種である。表1で青花匜と釉裏紅匜の装飾構成を比較し，それぞれの相違点，また共通するところについて検討する。

〈表1〉a．青花匜

	外側面の文様	内側面の文様	見込みの文様	所　蔵	典　拠
1	○ラマ式蓮弁文	○蔓唐草文	○霊芝風唐草文		2（図64）
2	○ラマ式蓮弁文	○蔓唐草文	○蓮束文	中国歴史博物館	4（図22）
3	○ラマ式蓮弁文	○蔓唐草文	○蓮束文	江西省博物館	10（図23）
4	○ラマ式蓮弁文	○花唐草文	○蓮束文	ＣＰ Lin コレクション	17（図11）
5	○ラマ式蓮弁文	○花唐草文	○兎霊芝文	大英博物館	3（単色図146）
6	○ラマ式蓮弁文	○花唐草文	○蓮束文	広東博物館	10（図24）
7	○ラマ式蓮弁文	○花唐草文	○蓮束文	Jean Gordon Lee コレクション	21（図133）
8	○蔓唐草文	○蔓唐草文	○霊芝風唐草文	安徽省博物館	14（86年第6期）

b．釉裏紅匜

	外側面の文様	内側面の文様	見込みの文様	所　蔵	典　拠
1	×	○波文	○鳳凰文		1（図231）
2	×	○波文	○雁文	高安県博物館	12（図27）
3	×	○雲文	○雁文	ＣＰ Lin コレクション	17（図15）
4	×	○波文	○霊芝風唐草文	フィラデルフィア美術館	1（挿図139）
5	×	○雲文	○兎霊芝文		9（図11）
6	不明	○波文	○魚藻文		1（挿図140）

（文様のある箇所は○，無い箇所は×で表す。典拠中の数字は文末の一覧を参照）

匜の外側面の文様の有無に関して，青花匜と釉裏紅匜に違いが見られる。青花匜では全てにラマ式蓮弁文あるいは唐草文の文様が描かれているのに対し，釉裏紅匜では文様は描かれない。だが，見込みでは両者には共通する文様が見られる。霊芝風唐草文（図1，図2）と，兎と霊芝という同じモチーフを扱ったもの（表1ａ・No.5と表1ｂ・No.5）である。釉裏紅が青花と比較して簡素な印象を与える大きな要因は，ほとんどの器種を通じて釉裏紅の器面の一部で文様が欠如しているからである。匜の場合も，やはり釉裏紅では外側面に文様が見られない。

また，釉裏紅匜には刻花で装飾された作例もいくつかみられる。だが，こうしたことから釉裏紅匜が青花に比べて，初期的な段階にあると即断するのは用心すべきであろう。見込みに描かれた主文様では，青花匜と釉裏紅匜では共通する文様が描かれることから，両者の同時代性は認められる。加えて，外側面が空白であるのは，刻花技法が併用される作例だけでなく，ほとんどの釉裏紅匜に共通する特長である。以上のことから，釉裏紅匜の装飾構成が，青花と比較して簡素であることは，必ずしもそれが初期的な作例である裏付けとはならないであろう。釉裏紅匜にみられるこのような空白は，他の理由も考えられるように思われる。

図1（表1a・No. 1）
青花靈芝風唐草文匙　径17.5cm
「陶磁大系41」より

図2（表1b・No. 4）
釉裏紅靈芝風唐草文匙　径17.4cm
「世界陶磁全集13 遼・金・元」より

図3（表2a・No. 8）
青花花唐草文玉壺
春瓶　高24.5cm
「元代瓷器」より

図4（表2b・No. 4）
釉裏紅折枝花卉文
玉壺春瓶高24.1cm
「東洋陶磁大観12」より

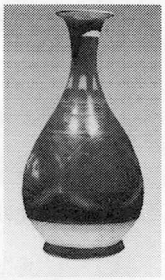

図5（表2b・No. 16）
釉裏紅人物文玉壺
春瓶　高33.0cm
「元代瓷器」より

図6（表3a・No. 3）
青花龍文罐　高30.0cm
「皇帝の磁器」より

図7（表3b・No. 1）
釉裏紅花鳥文罐　高24.8cm
「青花釉裏紅」より

図8（表6a・No. 1）
青白磁刻花紅釉花文玉壺春瓶　高30.5cm
"Yuan Porcelain and Stoneware"より

図10　青白磁刻花紅釉龍文扁壺　高37.0cm
北京故宮博物院蔵
「元代瓷器」より

図9　青花龍文扁壺　高36.8cm
V&A美術館蔵
"Oriental Blue and White"より

図11（表4a・No. 9）
青花牡丹唐草文梅瓶　高43.4cm
「世界陶磁全集13 遼・金・元」より

図12（表4b・No. 1）
釉裏紅鳳凰文梅瓶　高39.5cm
「世界陶磁全集13 遼・金・元」より

図13（表2a・No. 15）
青花鳳凰文玉壺春瓶
"T. O. C. S. vol. 37"より

図14（表2b・No. 17）
釉裏紅飛鳥文玉壺春瓶　高28.9cm
"T. O. C. S. vol. 37"より

図15（表2a・No. 28）
青花折枝花卉文玉壺春瓶　高25.0cm
「文物　'80年第5期」より

2．青花玉壷春瓶と釉裏紅玉壷春瓶，及び青白磁玉壷春瓶の装飾構成

玉壷春瓶とは，胴が膨らみ，頸が細くしぼられ，口縁がラッパのようになる瓶である。青花や釉裏紅以外でも，刻花や印花，堆花の技法もみられる。表2で青花玉壷春瓶と釉裏紅玉壷春瓶の装飾構成の比較を行ない，両者の相違を検討する。

〈表2〉 a．青花玉壷春瓶

	口部の文様	頸部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	出光美術館	2（図11）
2	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○蓮華文	○ラマ式蓮弁文		2（図57）
3	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○蓮池文	○ラマ式蓮弁文	ＣＰＬｉｎコレクション	17（図12）
4	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○鳳凰文	○ラマ式蓮弁文		2（図58）
5	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○鳳凰文	○ラマ式蓮弁文	マルコス美術館	10（図92）
6	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○海馬鳳凰文	○ラマ式蓮弁文		2（図59）
7	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○菊唐草文	○ラマ式蓮弁文	富士美術館	10（図96）
8	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○花唐草文	○ラマ式蓮弁文		10（図95）
9	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○花唐草文	○ラマ式蓮弁文		2（挿図68）
10	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○花卉文	○ラマ式蓮弁文	アレッツォ中世美術館	2（挿図72）
11	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○花卉文	○ラマ式蓮弁文	富士美術館	10（図45）
12	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○雲肩蓮池文	○ラマ式蓮弁文	ボストン美術館	3（図73）
13	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	広東省博物館	10（図102）
14	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○葡萄唐草文	○ラマ式蓮弁文	大英博物館	18（図４）
15	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○鳳凰文	○ラマ式蓮弁文		23（図41ｄ）
16	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○花卉文	○ラマ式蓮弁文		23（図41ｄ）
17	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○獅子文	○ラマ式蓮弁文	河北省博物館	1（図208）
18	欠	○ラマ式蓮弁文	○雲肩蓮池文	○ラマ式蓮弁文	大阪市立美術館	2（挿図70）
19	欠	○ラマ式蓮弁文	○蓮池水禽文	○ラマ式蓮弁文		2（挿図69）
20	欠	○ラマ式蓮弁文	○蓮池文	○ラマ式蓮弁文		1（挿図116）
21	○蕉葉文	○花卉文	○花卉文	○ラマ式蓮弁文	梅沢記念館	1（図207）
22	○花卉文	○花卉文	○蓮池水禽文	○ラマ式蓮弁文	首都博物館	10（図94）
23	○波涛水魚文	○波涛水魚文	○波涛水魚文	○ラマ式蓮弁文		10（図99B）
24	○人物文	○人物文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	江西上饒市博物館	10（図100）
25	○孔雀文	○孔雀文	○孔雀文	○ラマ式蓮弁文		10（図105）
26	○龍文	○龍文	○龍文	○ラマ式蓮弁文		10（挿図26）
27	×	○蔓唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	台北故宮博物院	5（図53）
28	×	○蓮弁文	○折枝花卉文	×	広東省博物館	14（80年第５期）

ｂ．釉裏紅玉壷春瓶

	口部の文様	頸部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	×	×	○鳳凰文	×	マルコス美術館	10（図170）
2	×	×	○折枝花卉文	×	首都博物館	10（図171）
3	×	○蓮弁文	○折枝花卉文	×	出光美術館	10（図168）
4	×	○蓮弁文	○折枝花卉文	×	メトロポリタン美術館	3（単色図62）
5	×	○蓮弁文	○折枝花卉文	×	ｻﾝﾌﾗﾝｼｽｺ・ｱｼﾞｱ美術館	21（図167）
6	×	○蓮弁文	○折枝花卉文	×		15（15号38頁）
7	×	○蓮弁文	○折枝菊花文	×	大英博物館	19（図101）
8	×	○蓮弁文	○折枝菊花文	×	景徳鎮陶磁館	10（図166）
9	欠	○蓮弁文	○折枝菊花文	×	ジャカルタ博物館	3（図45）
10	×	○蓮弁文	○詩文	×	大英博物館	18（図３）
11	×	○蓮弁文	○霊芝兎文	×	北京故宮博物院	11（図586）
12	不明（金属蓋）	○蓮弁文	○鳳凰文	×	ジャカルタ博物館	3（図44）
13	×	○蕉葉文	○人物文	×		10（図163）
14	×	○ラマ式蓮弁文	○雲鶴文	×	高安県博物館	12（図28）
15	×	○ラマ式蓮弁文	○鳳凰文	×	江西省博物館	10（図165Ａ）
16	○格子文	○ラマ式蓮弁文	○窓絵人物文	×	上海博物館	10（図165Ｂ）
17	○蕉葉文	○ラマ式蓮弁文	○飛鳥文	○ラマ式蓮弁文		23（図42ａ）

c．青白磁，白釉玉壷春瓶

	口部の文様	頸部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	×	×	○折枝花卉文	×	大英博物館	18（図１）
2	×	○蕉葉文	○花卉文	○蓮弁文	メトロポリタン美術館	3（単色図58）
3	×	○蕉葉文	○牡丹唐草文	○蓮弁文		7（図90）
4	×	○蕉葉文	○折枝花卉文	○蓮弁文	C. P. Lin コレクション	17（図５）
5	×	○蕉葉文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	中国歴史博物館	13（図125）
6	×	○蕉葉文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	北京故宮博物院	10（図369Ａ）
7	×	○蕉葉文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	ロイヤル・オンタリオ博物館	16（図３）
8	×	○堆花蓮弁文	○堆花花卉文	×	フィッツウィリアム美術館	1（挿図105）
9	×	○ビーズ飾り蓮弁文	○ビーズ飾り窓絵花卉文	○ラマ式蓮弁文	アイルランド国立博物館	1（図43）
10	×	○ビーズ飾り蓮弁文	○ビーズ飾り窓絵花鳥文	○ラマ式蓮弁文	大阪市立東洋陶磁美術館	1（挿図106）
11	欠	○ビーズ飾り蓮弁文	○ビーズ飾り窓絵獅子文	○印花ラマ式蓮弁文	ジャカルタ博物館	3（図40）
12	不明（金属蓋）	○ビーズ飾り蓮弁文	○ビーズ飾り窓絵花卉文	○ラマ式蓮弁文	ジャカルタ博物館	3（図39）
13	不明（金属蓋）	○ビーズ飾り蓮弁文	○ビーズ飾り花卉文	○ビーズ飾り蓮弁風文	Ｖ＆Ａ美術館	1（図181）

d．青白磁刻花紅釉玉壷春瓶

	口部の文様	頸部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	×	×	○花文	×	デヴィッド財団	16（図23）
2	×	×	○花文	×	北京故宮博物院	10（図161Ｂ）
3	×	×	○鳳凰文	×	大和文華館	1（挿図135）
4	×	×	○鳳凰文	×	松岡美術館	10（図161Ｃ）
5	×	×	○鳳凰文	×		10（図162）
6	×	×	○兎霊芝文	×	北京故宮博物院	10（図161Ａ）

（文様のある箇所は○，ない箇所は×，欠は欠損を示す。典拠中の数字は文末の一覧を参照）

玉壷春瓶でも，釉裏紅における文様の欠如が明らかに認められる。表２からは，全体的に文様が充填されている図３のような青花玉壷春瓶に対し，釉裏紅玉壷春瓶では若干の例外をのぞき，図４のようにほとんど口部で文様が欠如しているのがわかる。加えて裾部にも文様がほとんどみられない。釉裏紅玉壷春瓶に見られるこのような文様帯の空白は，技法の初期的な段階を示唆しているようにも受けとれる。これまでにも釉裏紅の頸部の蓮弁文が，それより早くに作られたと思われるビーズ装飾を持つ玉壷春瓶の頸部の蓮弁文と似通っている点が指摘されている[注11]

だが，ここで釉裏紅玉壷春瓶の裾部に注目したい。図５の繁縟な装飾の釉裏紅玉壷春瓶は，おそらく元末のものか，あるいは明初のものである可能性も考えられる[注12]。だが，その他の釉裏紅玉壷春瓶と同様に，やはり裾部に文様は見られない。こうした作例は，必ずしも釉裏紅玉壷春瓶に見られる文様の欠如の全てが，時代的な理由で片付けられないことを示している。また，釉裏紅や青花以前から景徳鎮窯で焼成されている青白磁等の玉壷春瓶では裾部に文様があるのに（表２ｃ），その後に誕生したと思われる釉裏紅及び青白磁刻花紅釉では裾部に文様がみられないのも奇妙に思われる。以上のことから，青花や青白磁玉壷春瓶と比較して，釉裏紅玉壷春瓶に顕著である文様の欠如は，何か別の理由があるのではないかという疑問が生じる。

3．青花罐と釉裏紅罐，及び青白磁罐の装飾構成

罐とは丸みを帯び横に広く肩部の張った大型の壷である[注13]。表３で青花罐と釉裏紅罐を比較し，両者の相違について考察する。

〈表３〉ａ．青花罐

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○龍文	○龍文	○波涛文	東京国立博物館	10（図67）
2	○ラマ式蓮弁文	○龍文	○ラマ式蓮弁文		10（図68）
3	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	出光美術館	8（図203）
4	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	高安県博物館	12（図11）
5	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	出光美術館	1（図54）
6	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文		10（図64）
7	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文		1（図193）
8	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文		10（図62Ｂ）
9	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文		10（図63Ｂ）
10	○ラマ式蓮弁文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	出光美術館	1（図191）
11	○花唐草文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文		12（図22）
12	○龍文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	北京故宮博物院	10（図73Ｂ）
13	○花唐草文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	東京国立博物館	3（単色図111）
14	○魚藻文	○魚藻文	○ラマ式蓮弁文	トプカピ博物館	10（図70）
15	○花唐草文	○魚藻文	○ラマ式蓮弁文	大阪市立東洋陶磁美術館	1（図56）
16	○孔雀文	○孔雀文	○ラマ式蓮弁文	イラン国立考古博物館	3（単色図179）

ｂ．釉裏紅罐

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○ラマ式蓮弁文	○窓絵花鳥文	×	高安県博物館	12（図26）
2	○ラマ式蓮弁文	○窓絵花鳥文	×	安徽省博物館	10（図182）
3	○ラマ式蓮弁文	○窓絵祈雨文	○弦文	揚州文物商店	10（図180）

ｃ．青白磁罐

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	韓国国立中央博物館	1（図187）
2	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	サンフランシスコ・アジア美術館	1（挿図103）
3	○蔓唐草文	○龍文	○蔓唐草文	山東省博物館	10（挿図68）

ｄ．青白磁刻花紅釉罐

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○蔓唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	江蘇省博物館	12（図24）
2	○ラマ式蓮弁文	○鳳凰文	○ラマ式蓮弁文	大和文華館	10（図179）

（文様のある箇所は○，ない箇所は×で表す。典拠中の数字は文末の一覧を参照）

表３を参照すると，青花罐（図６）や青白磁罐，青白磁刻花紅釉罐では，器面の全てに文様が描かれている。それに対し，図７のような釉裏紅罐では三点中二点の裾部で，文様が欠如している。残る一点の裾部の文様も，青花や青白磁の罐に多くみられるラマ式蓮弁文ではなく，波文風の弦文が描かれる。胴部の主文様に関しては，青花罐と釉裏紅罐で，共通するものは見られない[注14]。青花罐と釉裏紅罐，そして青白磁罐，青白磁刻花紅釉罐の装飾構成を比較した結果，罐においてもやはり釉裏紅では器面の一部で文様の欠如がみられる。しかし，釉裏紅罐の肩部や胴部ではかなり細部まで絵付けがされていることから，裾部の文様の欠如が技法の初

期的段階ゆえに生じているものとは考えにくい。また，青花や釉裏紅以前より早い時期のものであると思われる青白磁罐は，裾部に文様があらわされる。このことから，釉裏紅罐の裾部にみられる文様の欠如には，他に何か理由があるのではないかという疑問が生じる。この疑問に関しては，後に取り上げることとする。ここで青白磁刻花紅釉について少し触れておきたい。青白磁刻花紅釉は，図８のような玉壷春瓶では，釉裏紅に非常に近い装飾構成を示しており，そのことはこれまでにも指摘されている[注15]。しかし，表３ｄの青白磁刻花紅釉罐や，青白磁刻花紅釉扁壷（図９）は青花のほうにより近い装飾構成を示している（図10参照）。青白磁刻花紅釉の景徳鎮窯における位置付けは，今後さらに研究が必要であると思われる。

４．青花梅瓶と釉裏紅梅瓶，及び青白磁梅瓶の装飾構成

梅瓶とは，口径が小さく，肩部が豊かに張り，裾部がすぼまった形をした瓶のことである。表４で青花梅瓶（図11）と釉裏紅梅瓶（図12）を比較し，両者の相違について検討する。

〈表４〉ａ．青花梅瓶

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○雲肩花卉文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	大英博物館	3（図39）
2	○鳳凰唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	高安県博物館	10（図79）
3	○鳳凰唐草文	○窓絵人物文	○ラマ式蓮弁文	湖北省武汉市文物商店	10（図83）
4	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	Ｖ＆Ａ美術館	1（図202）
5	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	ボストン美術館	10（図84）
6	○花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	ボストン美術館	10（図85）
7	○ラマ蓮弁と花唐草文	○人物文	○ラマ式蓮弁文	南京市博物館	10（図81）
8	○雲肩蓮池文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	高安県博物館	10（図80）
9	○麒麟唐草文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文		1（図200）
10	○花唐草文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	大阪市立東洋陶磁美術館	10（図88）
11	○雲肩花卉文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	ボストン美術館	3（図74）
12	○ラマ蓮弁と花唐草文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	上海博物館	10（図86）
13	○ラマ式蓮弁文	○松竹梅文	○ラマ式蓮弁文	出光美術館	10（図89）
14	○花唐草文	○牡丹唐草文	○ラマ式蓮弁文	イラン国立考古博物館	3（図88）

ｂ．釉裏紅梅瓶

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○雲肩飛鳥文	○牡丹鳳凰文	○ラマ式蓮弁文	大和文華館	1（図206）
2	○雲肩飛鳥文	○牡丹鳳凰文	○ラマ式蓮弁文	MOA美術館	8（図213）

ｃ．青白磁梅瓶

	肩部の文様	胴部の文様	裾部の文様	所　蔵	典　拠
1	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	ボストン美術館	1（図41）
2	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	江西省博物館	10（図363）
3	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	韓国国立中央博物館	1（図187）
4	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	大英博物館	18（図２）
5	○花唐草文	○龍文	○ラマ式蓮弁文	出光美術館	1（挿図102）
6	○蔓唐草文	○龍文	○蔓唐草文	山東省博物館	1（挿図141）

（文様のある箇所は○で表す。典拠中の数字は文末の一覧を参照）

梅瓶は，釉裏紅の作例が非常に少ないが，これまでみてきた器種とは明らかな違いが，表4からわかる。器面の一部における文様の欠如が，これまでに見てきた釉裏紅の特長であった。しかし釉裏紅梅瓶は，青花や青白磁梅瓶と同じように器面全体に文様が描かれる。特に，釉裏紅梅瓶の裾部で，青花や青白磁と同じラマ式蓮弁文が描かれていることが注目される。

以上匜，玉壷春瓶，罐，梅瓶の四つの器種を取り上げ，青花と釉裏紅それぞれの文様や装飾構成についての比較を行った。梅瓶以外の器種では，絵付けの丁重な青花に対し，釉裏紅は描線がやや粗く，また装飾構成や文様が簡略である。釉裏紅で文様が簡素であるのは，新しい技法の初期の段階ゆえに，器面全体の装飾構成がまだ始まっておらず，そのために空白が生じたという考えもある。だが，青花や釉裏紅の以前から焼成されている青白磁では，文様は器面全体にあらわされることがほとんどである。また匜の作例では，見込みの文様で青花と釉裏紅に共通しているものがあることから，両者の同時代性は認められる。以上のことから，釉裏紅にみられる空白箇所，特に多くの瓶や壷に共通する裾部や，匜の外側面に見られる空白箇所は，技法の初期ゆえに生じたという可能性は低いと思われる。また，銅はコバルトと比較して，焼成が困難でにじみやすいために空白が設けられた，という可能性も少なそうである。なぜなら，残された作例からも明らかであるように，焼き上がりの出来不出来は，空白部分の有る無しで左右されるものではない。

では，こうした空白箇所は，なぜ生じるのであろうか。各表から，釉裏紅の空白となっている箇所は，青白磁や青花ではほとんどがラマ式蓮弁文で占められていることがわかる。つまり釉裏紅における空白部分が生じる原因の一つは，青花や青白磁で多く用いられるラマ式蓮弁文がほとんどみられないことによる。釉裏紅でもなかにはラマ式蓮弁文が用いられている作品も数えることができるが（既に作成した表1～4から，釉裏紅玉壷春瓶で四点，釉裏紅罐で三点，釉裏紅梅瓶で二点。大半はにじみが多く判別しがたい），しかし，それらの多くは頚部や肩部にみられる覆式ラマ式蓮弁文（図7参照）であり，青白磁や青花の玉壷春瓶や罐，梅瓶の裾部のほとんどを占める花弁が上向いた仰式ラマ式蓮弁文は，今回取り上げた釉裏紅の全作例でわずか三点（表2ｂ・no. 17の玉壷春瓶と表4ｂ・no. 1，2の梅瓶二点）を数えるに過ぎない。青白磁や青花で多用される仰式ラマ式蓮弁文が，釉裏紅でほとんど使用されていない事実は，景徳鎮窯における釉裏紅の位置付けを考える上で重要な手がかりとなると思われる。この点について，以下考察を行ないたい。

5．ラマ式蓮弁文について

ラマ式蓮弁文は，元代だけでなく，明代にわたっても用いられ，編年の手がかりとしても重要視される文様である。青白磁や青花では多用される文様が，釉裏紅ではみられないのは，し

かし，ラマ式蓮弁文に限らない。たとえば龍文様（青白磁刻花紅釉を除く）もそうである。龍文は中国では皇帝をあらわす特別な文様である。このような文様が，釉裏紅ではみられないのは，その文様の特別性ゆえに釉裏紅での使用が禁じられていた可能性がある。「元史」では，双角五爪の龍を禁じる記述があり[注16]，龍文様，中でも五爪の龍の使用は厳禁されていた。ラマ式蓮弁文が釉裏紅でほとんど見られないのは，それもまた龍文と同じような制約を受けていた可能性も考えられる。ラマ式蓮弁文は，従文様あるいは副次的文様と呼ばれるものであり，景徳鎮窯では元代になって新しく登場した文様である。枢府白磁や，1320年頃の韓国新安沖の沈没船から発見された青白磁にはラマ式蓮弁文が既にみられる。このことから青花の誕生以前から景徳鎮窯での使用は始まっていた。おそらく景徳鎮窯におけるラマ式蓮弁文の初源は，枢府白磁あるいは青白磁であったのだろう。筆者はここで，枢府白磁上のラマ式蓮弁文に注目したい。枢府白磁は，磁器上に枢府という文字が型押しされているところからこの名がつけられる。朝廷が使用する御器であったと考えられているのは，元時代では禁止されていた五爪の龍が装飾されているからである。そして，そこには従文様としてラマ式蓮弁文が使用されている。以下は，高足杯の枢府白磁，青花，釉裏紅の表である。枢府白磁の中で高足杯を選んだ理由は，枢府以外にも，青花，釉裏紅の技法をこの器形に見ることができるからである。龍の爪の数に言及するため，この表に限り，龍の爪の本数を付けている[注17]。

〈表5〉 a．枢府高足杯

	外側の文様	内側の文様	所　蔵	典　拠
1	×	○五爪龍文・ラマ式蓮弁文		14（82年第4期）
2	×	○五爪龍文・ラマ式蓮弁文		8（図16）
3	×	○四爪龍文・花文	大英博物館	18（図5）
4	×	○四爪龍文・花文	高安県博物館	14（88年第5期）
5	×	○四爪龍文	旧 Harry Garner コレクション	21（図121）
6	×	○四爪龍文	フィラデルフィア美術館	21（図122）
7	×	○三爪龍文		14（82年第4期）
8	×	○龍文	韓国国立中央博物館	1（図189）
9	×	○龍文	上海博物館	4（図9）
10	×	○ラマ式蓮弁文		22（図70）

b．青花高足杯

	外側の文様	内側の文様	所　蔵	典　拠
1	○三爪龍文		アシュモリアン博物館	21（図131）
2	○三爪龍文	○印花四爪龍文	南京市博物館	12（図31）
3	○三爪龍文	○印花四爪龍文		2（図63）
4	○三爪龍文	○印花ラマ式蓮弁文	大英博物館	18（図6）
5	○三爪龍文	○印花ラマ式蓮弁文	北京故宮博物院	10（図139）
6	○三爪龍文	○印花龍文	Mr. and Mrs. Severance コレクション	21（図130）
7	○三爪龍文	○印花龍文		10（図140）
8	○纏枝菊文		高安県博物館	12（図25）
9	○梅月文			6（図67）
10	○梅月文			14（82年第2期）
11	○松文			14（82年第2期）
12	○竹文			14（82年第2期）

13	○鳳凰文			10（図143）
14	×	○梅枝文		14（86年第1期）

c．釉裏紅高足杯

	外側の文様	内側の文様	所　蔵	典　拠
1	○菊花文		高安県博物館	14（82年第4期）
2	○梅枝文	○印花唐草文	R. F. A. Riesco コレクション	20（図2B）

d．青白磁紅釉高足杯

	外側の文様	内側の文様	所　蔵	典　拠
1	○紅斑	○印花菊文	高安県博物館	14（82年第4期）
2	○紅斑		北京故宮博物院	10（図177）

（文様のある箇所は○，無い場所は×で表す。典拠中の数字は文末の一覧を参照）

表からは，青花高足杯の龍の爪は三本であるが，枢府では四本あるいは五本のものがある[注18]。つまりラマ式蓮弁文が釉裏紅でほとんどみられない理由として，次のような仮説が立てられる。ラマ式蓮弁文は，景徳鎮窯での使用が開始され始めたごく初期に，御器上で民間での使用が禁止されていた五爪の龍と共に用いられた。このことから，龍の尊貴性がラマ式蓮弁文に付加され，その使用に際しても，龍文と同じような制約を受けるようになったという考えである。それゆえ，龍文様の使用が可能な青白磁や青花ではラマ式蓮弁文が使用されているが，龍文様自体が使用されていない釉裏紅では，ラマ式蓮弁文の使用もまた制約されているのではないだろうか。

6．例外的な作例について

こうした推定を間接的に証明すると思われるのが，釉裏紅で例外的にラマ式蓮弁文が使用されている作例である。釉裏紅では，ややにじみが目立つものも含めると，表1～5の中の九点にラマ式蓮弁文の使用が確認された。そのうちの六点は，瓶の頸部や肩部に覆式ラマ式蓮弁文として使用されたものであり，青白磁や青花に多用される仰式ラマ式蓮弁文は，釉裏紅三十点中三点に過ぎない。だが，その例外的作例である三点ともに，青花のラマ式蓮弁文とは異なる表現がされている。一点はフィリピンで出土した釉裏紅玉壷春瓶（図14）である。裾部のラマ式蓮弁文は，青花の，肩が角張って左右がやや聳えるようになるものとは違い，全体に丸みを帯びる。同じく東南アジアで出土し，装飾構成も似通った青花玉壷春瓶（図13）と比較しても，その相違は明らかである。このように肩部分に丸みを帯びるラマ式蓮弁文は，今回調べた青花の中では見られない。さらに，より異なった特長をあらわしているのが，釉裏紅梅瓶（図12）のラマ式蓮弁文である。この釉裏紅のラマ式蓮弁文の外枠は，アルデビル廟に伝世した青花盤[注19]の見込みのラマ式蓮弁文や，トプカピ博物館の青花八角瓢形瓶[注20]の口部のラマ式蓮弁文の外枠を連想させる。しかし，蓮弁内に描かれる文様や，蓮弁の外枠と内枠の間の奇妙

な丸や点は，青花に類例を見ることができず，明らかに青花とは異なる表現がされている。つまり，ラマ式蓮弁文がほとんど見られない釉裏紅にも，わずかに例外的な使用が認められながらしかし，そのいずれもが青花のラマ式蓮弁文では見られない表現がされている。こうした点は，釉裏紅におけるラマ式蓮弁文の使用の制約を示唆しているのではないだろうか。

器形の裾部の文様に関しては，青花にも，また例外的な作例がある。青花折枝花卉文玉壷春瓶（図15）は，今回調べた青花のなかで唯一，裾部が空白となっている。裾部に文様が見られないだけではなく，口部の文様も空白となっており，さらに頚部には蓮弁文が描かれている。このことから，青花玉壷春瓶というより，釉裏紅玉壷春瓶に特長的な装飾構成を示している。しかし，瓶の胴部には，至正様式の青花に頻出する射干という文様が描かれる。今回調べた釉裏紅の中で，射干が使用されているものは一点もみられない。すなわち，この青花玉壷春瓶は，釉裏紅と同様の装飾構成を示しながらも，描かれる文様は，注意深く青花の文様が選ばれているようなのである。こうしたそれぞれの技法に見られる例外的な作例は，非常に興味深く思われる。元時代の青花と釉裏紅は，似通った文様，似通った装飾構成を互いに示しながらも，全く同じ作例をほとんどみることができない。その理由として，両者の間では装飾構成や，ときには文様で意識的な相違が設けられていたと考えられるかもしれない。

おわりに

元時代景徳鎮窯では多くの種類の磁器が焼成されている。それらには様々な技法が用いられ，ときに技法は併用される。それゆえ，取り上げる個々の作例によって，当時の景徳鎮窯に見られる種々の技法に対する考え方も異なってくる。これまでは，いくつかの作例を取り上げ，それらをつないでいくことで，元時代後期景徳鎮窯を理解しようとする方法が主にとられてきた。本稿では，対象とする技法の中から，可能な限りの作例を取り上げ，その大部分がわずか数十年の間の作品群であることを考慮に入れ，あえてそれらを平面上にとらえたうえで比較を試みた。

その結果，青白磁や青花，釉裏紅それぞれは，装飾構成に，技法ごとの特長がみられることが明らかとなった。これまでにも研究者によって指摘されてきたように，青花では器面全体に文様が充填される傾向にある。青白磁では，玉壷春瓶の口部に文様が見られないものの，罐や梅瓶では青花と同様の装飾構成を示す。釉裏紅では匜の外側面や，玉壷春瓶や罐の多くで，裾部が空白となっている。ただ，青白磁刻花紅釉は，玉壷春瓶や罐の比較のところでも触れたように，器種によりその特長が異なるため，技法ごとの特長を示すことができなかった。

釉裏紅で，器面の一部に空白が生じているのは，青白磁や青花で多く見られる仰式ラマ式蓮弁文の使用が，釉裏紅ではほとんど見られないことがひとつの要因であると考える。青白磁や

青花に多用される文様が，釉裏紅においてみられないのは，ラマ式蓮弁文だけでなく，龍文もまた同様である。龍文，中でも五爪の龍は，民間で使用が禁じられており，御器である枢府白磁で，ラマ式蓮弁文と共にその使用を見ることができる。ラマ式蓮弁文は，景徳鎮窯におけるその使用が行なわれるようになったごく早い時期に，枢府白磁上で，五爪の龍と共に用いられたことから，五爪の龍の持つ尊貴性が付加されたのではないだろうか。それゆえ，龍文が使用されていない釉裏紅では，ラマ式蓮弁文もまた見ることができないとも考えられる。

つまり釉裏紅は，青白磁や，御器である枢府白磁，富裕なイスラム圏への輸出品でもあった青花と比べて，より民間に近いものであったと思われる。青花に比べて釉裏紅は伝世品を含めて，現存する作例が非常に少ないこともそうした考えを裏付ける。以上のことから，釉裏紅の装飾構成が，青花と比較して簡素であるのは，全てが技法の発展段階によるものとは限らず，文様の制約ゆえに，簡素にとどまっている可能性もまた考えられよう。

注

注1　J. A. ポープ「元・明初の青花」『世界陶磁全集11　元明編』，河出書房，1955年

注2　中国珪酸塩学会編『中国陶磁通史』，平凡社，1991年，p. 312

注3　李汝寛　井垣春雄訳『中国青花瓷器の源流』，雄山閣，1982年

注4　吉田光邦「青花の技術」『世界陶磁全集11　元明編』，河出書房，1955年，p. 267
佐藤雅彦『中国陶磁史』，平凡社，1979年，p. 171
Medley, M., "Yüan Porcelain and Stone Ware", Faber and Faber, 1974, p. 32-33

注5　馮先銘「青花磁器の起源に関する諸問題」『世界陶磁全集13　遼・元・明』，小学館，1981年

注6　Aga-Oglu, K., "Relationship between the Ying-Ching, Shu-Fu and Early Blue and White", Far Eastern Ceramic Bulletin no. 8, 1949, p. 2
斎藤菊太郎「元代染付考（下）」古美術19，1967年，p. 69

注7　Addis, J. M., "Porcelain-Stone and Kaolin: late Yüan developments at Hutian" T. O. C. S. vol. 45, 1981, p. 60

注8　中沢富士雄／長谷川祥子『元・明の青花』，平凡社，1995年
なお青白磁刻花紅釉という呼び名は，長谷川氏の「元（至正）様式の青花磁器誕生についての一考察」（東洋陶磁，vol. 29，1998－1999）中で使用される。ここではその名称に従う。

注9　Garner, H., "Oriental Blue and White", Faber and Faber, 1970, p. 3
Medley, M., "Yüan Porcelain and Stone Ware", Faber and Faber, 1974, p. 35-36
両者の意見は，ただ，あくまでも青花を中心に考えてのものであり，釉裏紅は副次的な存在としてとらえられている。

注10　取り上げる作例は，釉裏紅との比較を明白にするために，器面が分割して装飾されている青花や青白磁を中心としている。

注11　Ayers, J., "Some Characteristic Wares of the Yüan Dinasty", T. O. C. S., vol. 29, 1954-55, p. 80
長谷川祥子「元（至正）様式の青花磁器誕生についての一考察」東洋陶磁 vol. 28，1998－1999，p. 17-18

注12　この釉裏紅玉壺春瓶が，元時代のものかあるいは明時代初期のものであるのかは，判断に迷うところである。しかし，頸部に覆式ラマ式蓮弁文があり，胴部に窓絵があることから，元様式であることは認められる。

注13　青花罐には耳付きのもの（青花牡丹唐草文双耳罐・トプカピ博物館蔵など）があるが，釉裏紅罐で

は耳付きのものは現在のところみられず，また罐の器形も耳の有無で違いがあるため表には含まない。

注14　罐では両技法が併用される作例がある。青花紅釉花卉貼花文壺（『世界陶磁全集13』，小学館，図52）と呼ばれるもので，コバルト，銅，そしてビーズ装飾までもが同一の器上に用いられている。青花と釉裏紅，そしてビーズ装飾の近接な関係を示すものである。

注15　Medley, M., "Yüan Porcelain and Stone Ware", Faber and Faber, 1974, p. 35-36
矢部良明『陶磁体系41　元の染付』，平凡社，1974年，p. 133
長谷川祥子「元（至正）様式の青花磁器誕生についての一考察」『東洋陶磁』vol. 28，1999年，p. 16-17

注16　「元史」本紀巻三十九，順帝二，中華書局

注17　高足杯の表に関して，図版からは印花技法（型押し）の文様の確認が困難な例もあり，表示の文様のいくつかは図版の解説に従っている。また文様の表記されていない箇所は，文様が必ずしもないのではなく，図版の解説で取り上げられていない可能性もあることを断っておく。龍の爪の表記の有無も同様である。

注18　『世界陶磁全集13』小学館，1981年，fig. 187

注19　青花でも，ごく稀に五爪の龍がみられることもある。たとえば中国歴史博物館蔵の龍文玉壺春瓶がそうである。しかし，これらの作例は，絵付けは粗く，全体に発色が悪く滲みが見られる。

注20　『世界陶磁全集13』小学館，1981年，図204

典拠

1　「世界陶磁全集13　遼・金・元」小学館，1981年
2　「陶磁大系41　元の染付」平凡社，1974年
3　「東洋陶磁大観１～12」講談社，1975年―
4　「中国美術全集３」京都書院，1996年
5　「宋・元の陶磁６　故宮博物院」日本放送出版協会，1997年
6　「遺品に基づく貿易古陶磁史概要」京都書院，1989年
7　「新安海底遺物」文化公報部文化財管理局編，同和出版公社，1983年
8　「皇帝の磁器――新発見の景徳鎮官窯――」大阪市立美術館編集，1995年
9　「目の眼」no. 281，里文出版，2000年
10　「元代瓷器」九州図本出版社，1998年，北京
11　「中国文物精華大全」商務印書館，1993年，香港
12　「青花釉裏紅」上海博物館／両木出版社，1987年，香港
13　「中国陶瓷全集16　宋元青白磁」美の美，1984年
14　〈文物〉文物出版社，北京
15　〈収蔵家〉収蔵家雑誌社，北京
16　"Yuan Porcelain and Stone Ware", Medley, M., Faber and Faber, 1970, London
17　"Elegant Form and Harmonious Decoration", Scott, R. E., Percival David Foundation of Chinese Art and Sun Tree Publishing Limited, 1992, London
18　"Chinese Porcelain from the Addis Collection", Addis, J. M., The Trustees of the British Museum, 1979, London
19　"Chinese Pottery and Porcelain", Vainker, S. J., The Trustees of the British Museum, 1991,London
20　"Oriental Blue and White", Garner, H., Faber and Faber, 1970, London
21　"Chinese Art under the Mongols: the Yüan Dynasty, 1279-1368", Lee,Sherman E., Ho, Wai-Kam., The Cleveland Museum of Art, 1987, 1968, ohio
22　"South-East Asian and Chinese Trade Pottery", The Oriental Ceramic Society of Hong Kong, 1979, Hong Kong
23　"Chinese Porcelain found in the Philippines", T. O. C. S., vol. 37, 1967-1969, London